
妄想戦記外伝

QOL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想戦記外伝

【コード】

N8676M

【作者名】

QOL

【あらすじ】

1 この話は作者の書いた「妄想戦記」から派生した外伝です。「妄想戦記」の主人公であるフェンは恐らく登場しません。

2 あくまで本編の外伝扱いなため、今後更新されるかも不明です。なお一応ゼロの使い魔のその後となっています。

3 原作レイプは当たり前ですので、読む際は注意してご覧ください。

「フェンの知らない外伝1」（前書き）

一応フェンが消えた後を書いてみました。

別にフェン君が活躍する本編とはもう関係がありません。

ギーシュ主人公k t k rな方はどうぞご覧ください。

尚、これはあくまで作者の“妄想”によって出来ていきますので、コ
コは原作と違つだろつとか言つのは受け付けませんのであしからず。

「フェンの知らない外伝1」

「フェンの知らない番外編1」

妄想戦記

Side三人称

フェンがWECRを暴走させていた時、水精霊騎士隊はクレータ
ーから噴き出す魔力粒子流の影響圏に入らないギリギリの位置でと
どまっていた。

A分隊を回収し終えた直後、まるで爆発が起こったかのような魔
力により、アルビオン軍が吹き飛ばす光景を見た彼らは、あれはフェ
ンが起した事であると直感していた。

こんな奇跡みたいな光景を造り出せるのは、あの規格外にも程が
ある黒髪の少年しかいない。

最初はエクリップスに乗りこむ人間たちは、また彼が新兵器か魔法
を使ったのだろうと考えていた。

だが

「こちらネレイドマム！レッドクリフ！応答してください！繰り返
します！」

「キノ、そつちは？」

「ダメですね。どうやらあの粒子は魔力で出来ているみたいです。こちらのセンサーじゃ無事かどうかわからないです」

エクリプスの臨時管制室では、シエスタが必死に呼びかけを行っていた。

シアとキノもエクリプスに搭載されたセンサー類を持って、フェンを確認しようとした。

だが、魔力粒子が強すぎてセンサーがジャミングされてしまう為、中心部で何が起きているのかが解らない。

恐らくは魔力流の中心に居るであろうフェンの安否すら不明であった。

その事はエクリプスに乗りこむパイロットたちも含めた全乗員にすぐさま伝搬した。

あの爆発の様な視認すらできる魔力の奔流はフェンが引き起こしたものである。

そして、そのフェンの安否は全く不明であるという事も伝わっていった。

「…ネレイドー！いやギーシュ何をしてやがる！」

『おやつさん止めないでくれ！彼を助けに行かなければ！』

「バカ野郎！あれを見て無かったのか！あんな嵐みたいな所に近寄ったらゼフィールでもひとたまりも無い！大体まだスラストーユニ

ツトまわりの修理が完了してねえんだぞ！」

『だけど！何か出来るかも知れない！見ているだけなんてできません！』

「チツ、聞く耳もたねえか・・・オイ、他のネレイド、フネ壊される前にアイツを止める」

『・・・いや、しかし』

「しかしもなにもあるか！ネレイド1を無駄死にさせる気か！あの小僧はそんな事望まねえ！」

『・・・了解。ギーシュ、悪いが止まってくれ』

『ギムリ！邪魔するのか！』

『悪いが、お前さんまで死なせる訳にはいかないんでな』

『だけど！』

『・・・手遅れだ。フェンは俺たちじゃ助けられないよ。だから頼む、俺に・・・俺達にお前を討たせないでくれ。このまま無断で出撃したら、俺達はお前を殺さなきゃならん』

『　　グッ・・・わかった』

格納庫ではギーシュがフェンを助けに行こうと、ゼフィールを駆動させようとしていた。

しかしソレは周りの仲間から止められた。規律では勝手にゼフィールを動かす人間は殺さなければならぬ。しかし彼らとてA分隊としてこれまで戦場で戦ってきた戦友を殺したく等は無い。

故に外に出ようとするギーシュを、まだ動くことが出来るギムリの機体が掴んで止めていた。

その頃、エクリプスの管制室では、シエスタがまだに通信を呼び掛けていた。

「こちらネレイドマム！レッドクリフ！応答してください・・・おねがい」

「シエスタ・・・もう、あれは」

「あきらめちゃダメだよシア！」

「・・・シエスタ」

「きっと、きっと通信がつかないだけ、いいえきっと今手が離せないだけなの、だから」

「シエスタッ！！！！」

「・・・っ」

半ば取り乱しているシエスタに、シアのカツが飛ぶ。
シアからのカツに一瞬身体を硬直させるシエスタを、キノが優しく抱きとめていた。

「シエスタ。心配するのは解らなくもないです。ですが、私たちがすべきことは他にもあるんですよ」

「だけど・・・だけど」

ぼろぼろと涙を流しているシエスタ。

多分あの光の中でフェンが消えてしまつと彼女は感じていた。

そして二度と戻ってくる事はないという事も

「こんな時彼なら“自分の仕事をしてから心配しろ”とか言いますね」

「泣いても状況が変わることは無い、ならば今自分に出来る事をするしかないです」

「自分に・・・出来る事　　ゴメン、キノもう大丈夫よ」

「あやや、そうですか。シエスタの黒くて柔らかい髪は中々の抱き心地だったのですが」

「もう、ふざけないでよ。さあお仕事しましょう」

「だな。まあフェンの事だし、案外ひよっこり帰って来るかも知れ

ないよ」

「……それはない、多分彼は二度と帰って来ない。」

シエスタはそう考えながらも、口に出すことはせず職務を全うする。

いまだ影響圏が広がりつつある魔力粒子奔流から逃れ、味方へと合流するルートを調べた。

自分出来ることをするしかない。フェンが居なくてもやらなくてはならない。

何処か寂しくて悲しいと感じつつ、彼女たちは自分たちの仕事を処理していった。

そして、魔力粒子奔流の消滅により、アルビオン戦役は終了する事になる。

フェンが消えた後、水精霊騎士隊はギーシュを隊長として再編された。

そしてかねてより言われていた通り、国家防衛隊として女王陛下直属の部隊となった。

勿論、彼らの強力な軍事力や魔法をもって他国に侵攻すべきと主張する貴族たちも居た。

しかし、意外な事にそれに待ったを掛けたのは、軍の名門のグラ

モン家を筆頭とする貴族たち。

中でも公爵家であるヴァリエール家が、水精靈騎士隊を使う事に待ったを掛けた。

宮廷貴族に公爵家に逆らえる程の貴族は存在せず、水精靈騎士隊は晴れて女王陛下直属の国防近衛部隊となった。この影には、水精靈騎士隊を作り上げた男の元主人が関与していたとあるが、詳細は不明である。

そして水精靈騎士隊はトリステインが持つ他国への抑止力として機能する事になる。

アルビオン戦役においてフェンが引き起こした魔力粒子奔流を見た他国は、ソレは水精靈騎士隊が引き起こしたモノと考え、彼らに恐怖した。

故に、トリステインに侵攻しようとする国は一国を除いてほぼ居なかった。

その後、水精靈騎士隊はフェンが育て上げた整備班を含む技術陣営と、練兵場基地下のマザーマシンによってゼフィールの量産配備が進み、完全な機甲師団となっていた。

その中でもアルビオン戦役に参加して生き残った5人は、水精靈騎士隊最強として恐れられる様になる。伊達に殺気や銃弾砲弾魔法弾が飛び交う戦場で生き残った訳では無い。

そして彼らは実戦の中で経験したことを、新しく配属される事となった新兵達に教える為、平時は教官として、軍にとどまって勤務する事となった。勿論その教え方はフェン直伝のUSN式であり、彼が基地に残した練兵マニユアルを通して、後に多くの優秀な兵士たちがあの練兵場から産声を上げる事となる。

水精靈騎士隊はその性質上、貴族と平民の垣根はほぼ無く、あの訓練は貴族平民問わず平等に課せられた。訓練後の本人の希望や適性によって、平民でもゼフィールに乗りこんだり、貴族でも技術屋の方が向いている場合、基地の技術陣営へと配属となって行った。

ゼフィールは魔力がなければ起動できないが、一度起動させてしまえば魔力がなくても動かすことが出来る。その為、魔力無しの平民でもゼフィールのパイロットとなる事もあり、中には魔法を使える貴族パイロット相手に、純粋な技量のみで勝った平民パイロットも生まれていった。

使えるものはなんでも使う。その精神の元、水精靈騎士隊に所属する者たちは、平民貴族の垣根を超えた国を守りたいという一つの意思の元で活動していく事になる。

貴族だろうが平民だろうが、使える者であるなら平民だろうと上官になる。トリステイン空海軍でもよくある光景だったが、地上部隊でそう言った関係になる軍はこれが初めてであった。

こうして野蛮な亜人に対する国内警備や、敵国からの侵攻に備える国境警備としての任についた水精靈騎士隊は、平民でも貴族でも関係無く活躍できる軍として人気を集めることになる。

またゼフィールの様な魔導兵器を保持している為、アカデミー等から再三にわたりゼフィールを解析させるという要請があったモノの、女王陛下直属という事を盾にソレらを防いでいた。

勿論しつつこく要請してくるため、ゼフィールに施された機密保持の為の自爆装置の事を教えた上で、「アカデミーが物理的に地上から消えてもいいなら提供してやる」と言う風に脅しをかけて返事を返した為、しばらくしてアカデミーは追及する事を止めた。

また他国からの密偵もゼフィールの秘密を探ろうと潜入してくる事もあった。

しかしゼフィール自体は数千年は稼働出来るように設計されたマザーマシンで造られる為、厳密な設計図と呼べるようなモノは無く、運良くマザーマシンのありかが基地地下である事を知った密偵達も潜入した後は帰っては来なかった。

時たま練兵場の近くの川で、身元不明の全身が穴だらけの無縁仏が上がることもあるだけで、マザーマシンに近寄れる人間は誰ひとり・・・いや、ギーシュ・ド・グラモンを筆頭とした元A分隊やオペレーター達や一部の人間を除き、近寄れる人間はいなかった。

何故ならマザーマシンに近づく為には、まずは“友達”となることが必要であったからだ。

そのようなことが出来るのは、あの楽しいトリスティン魔法学院で過ごし、ある存在と友達であった一部の人間だけだった。

まさかマザーマシンのある所に行く為には、トリスティン魔法学院にて警備を行っている、のほほんとした優しい性格の蜘蛛型ガールと友達にならなければならぬといけない等と誰が予想出来

ようか？そんな訳で水精霊騎士隊の機動兵器は秘匿されていく事になる。

だが、全てが秘匿されていた訳ではない。

ゼフィールの四肢や装甲素材、様々なセンサー類や手持兵装。

ソレらには流石に自爆装置については居ない為、ソレらを解析して技術公開を行った。

これにより今まで知られてはいなかった特殊な金属や合金が出回る様にもなっ行って行く事になる。

特に遠くの人間と話すことが出来る通信機の普及は国の在り方を変えた。

今まで以上に情報に価値が生まれ、ソレをあつかう人間も増加する事になる。

また、通信機をバラして解析し、応答は出来ないが聞くことが出来る様にしたモノ。

通称ラジオが非常事態用に国民に普及させるようになった。

風石を動力源としたラジオであり、非常用ではあったがソレらも国民から受けていた。

何せそのラジオは、平時には音楽やら雑談が流れるようになっていたからだ。

娯楽の少ないハルケギニアにおいて、ラジオは瞬く間に普及する。電波という概念はあまり知られてはいなかったが、面白いモノに人は集まる。

小さな村には公共用として、村一つにラジオが一つ配られて音楽や雑談や漫談、またはニュース等も流れるようになっていくようになり、後には生活に役立つ小ネタの様な情報や田畑の効率の良い耕し方、国家事業で国が人手を募集中などの広告まで流れる様になっていった。

かくしてハルケギニア初の情報社会というものが生まれた。

これらは後に更に進化を遂げ、現代地球で言う所のインターネット的なモノへと発展していく。

そこまで進歩するのは、大分先の事ではあった。

だが、そうなるきっかけをフェンが持ち込んだという事は誰ひとりとして知る者は無かった。

いずれにしてもハルケギニアの停滞した世界を、本来は有り得なかったイレギュラー。

フェンがこの世界によって、歯車がかみ合い動きだしたのは確かだ。

ソレを知る者はほんの一握りの人間だけ。

引っ掻き回すだけ引っ掻き回し、嵐の様に去っていったイレギュラー。

その存在を詳しく知る者は、後のハルケギニアに現れることは無かった。

だが後の歴史家は語る。彼の者が現れた時がこの世界の転機であったという事を。

別の歴史家は語る。彼の者こそが、停滞していたこの世界を動かしたモノであると。

魔法研究家は語る。彼の者が造ったクレーターを生み出すには、魔導炉を複数暴走させる必要がある、ソレを純粹な己の魔力のみで行ったなんて信じられないという事を。

宗教研究家は語る。彼の者は人知を超えた存在、ある意味で超常的なモノだったのではと。

しかし、詳しい文献は一切ない。その為彼の事を示す書物は二種類ある。

古の小国トリステインを技術大国にまで押し上げた“白き機械神”アルビオン大陸の軌道を変えてしまふ力を持ち、戦乱に更なる戦乱を招いた“白銀の悪夢”

どちらが一体正しいのかは、後の歴史家たちの間で今だ物議をかもしている。

だが言えることは只一つ、彼の者こそが世界を動かした存在であった。ただそれだけ。

その為学院長に頼みこみ、部屋の一つを執務室として開放して貰っていた。

以前、フェンが言っていたことが良く解る。

軍の指揮官職なんて、平時じゃ只の事務屋でしか無いって事を・・。

ああ、定時訓練の時間が待ち遠しい、最近ではそれ以外に書類から逃れる術がない。

トントン

「ん？どうぞ？」

「おーっす、どうだ生きてっか？」

「この状況を見てー、大丈夫だと思えるんならー、僕はサイトに水メイジを紹介するよー」

「・・・マジで大丈夫か？」

「大丈夫、なんかテンションあがってきた」

「さて、身体をゆするな。そして、とりあえず休め」

部屋に入ってきたのは、アルビオン戦役時に死んだと思われていたサイトであった。この男は瀕死というか実際仮死にまで陥ったのだが、サウスゴータの森に住む“妖精”に助けられた。

後にフェンが本当に居ないかを探していたエクリプスのセンサー

に引つ掛かり、そのまま回収されて現在に至る。

なお“妖精”さんを見て、ギーシュ達がひと悶着起こすかと思えば、そんなことは無かった。

彼らは既にそう言った“種族”に対する差別や侮蔑等はない。

戦場に出ればみな平等、生きるか死ぬかのソレだけでしか無かったからである。

つか、フェンの事が気がかりで、もはやそんなことはどうでもよかったってのもある。

「あう〜・・・」

「・・・たく、仕方ねえな。後でシラン探して手伝ってやるよ」

机に突っ伏しているギーシュに肩をかして、執務室のソファアに放り投げるサイト。

グフっと言ってサイトを睨むギーシュだが、もはやそれもつかれたらしい。

「ありがとーね。じゃあ、僕は2時間程仮眠をとるよー」

「おう寝とけ寝とけ」

「ぐー」

「って早いなオイ」

執務室のソファアに横になった途端、いびきを掻き始めた友人を見てサイトは苦笑した。

「ただけオーバーワークしてるんだと考えつつ、後でモンモンに連絡して介抱させたら面白い事になるだろうなと考えていた。」

「さて、ほいじゃ手伝ってやりますかね」

彼は執務室に置かれたあの日自分と共に、この世界にやってきたノートPCを立ち上げた。本当なら電池がなければ動かない代物だったが、シランが充電してくれるお陰で動かせるのである。

おまけに書いた内容をシランに渡せば、ソレをハルケギニアの言語に変換してもらえる為、彼もギーシュの書類整理を手伝う事が出来た。使い魔のルーンのお陰で文字を読むことは容易であり、書類を読んで書いた内容をハルケギニアの言語に変換すれば、通常の何倍も早く仕事が出来たのだ。

ちなみにギーシュを手伝う本職の秘書さんもちゃんといえるのだが、そちらもオーバーワークであるので現在休暇中なのである、ちなみにその人は言わずと知れた元オスマンの秘書さんだったりするが・
・まあオスマン翁のセクハラに耐えかねたと言っても良いだろう。

ソレはさて置き、何気にアルビオンからの生還後、サイトも水精霊騎士隊へと名誉顧問として招かれている。勿論純粋な兵士とかではない為、指揮権は存在していないのだが、ルーンのお陰で武器を

用いた近接戦闘に長けているので、その面での武術指導を行っていた。

また、フエンから習った卑怯臭い戦法の顧問でもあるのは余談だ。閃光弾もどきや煙幕に始まり、砂を掛ける臭い液体を拭きかけるは当たり前。

貴族からすれば許容でき無さそうな戦い方であるが、実際かなり効果的なのだ。

似た様な事態の対処法として、習わせるといふカリキュラムも既に組まれていたりする。

まさか異世界で教官と秘書の真似ごとをする羽目になるとはなー。そう思いつつも、書類へと目を走らせるサイトだった。

「さてと、どれどれ？ 誰だ？ チョコバーを簡易携帯食にしたい上申書とか・・・」

「こっちの補給物資はいいとして、ゼフィールの材料が少し足りないのか・・・」

「えーと、こっちのデータを映して・・・むむ、結構無駄多くないか？」

「この書類は・・・エレオノールさん、まだゼフィールの事諦めて無かったんだ」

「こうして、ああして・・・あつと、そろそろ戻らねえとルイズに殺されるな」

パタンとノートPCを閉じて、ふと時間を見てみると自分が来てから1時間経過していた。

たった一時間でも大分書類を処理出来たので、ギーシュの負担も大分減る事であろう。

つかエクスセルって本当に偉大だったんだなと、しみじみ感じていたりする。

まだ眠っているギーシュは、後1時間は仮眠をとることだし、そつとしておこう。

そう思い彼は執務室を出ていった。途中でモンモンに連絡しておくのも忘れない。

それが何でもできる紳士な使い魔たる自分の仕事だもんねー。後でシランに頼んでPCの充電と中のデータの変換をしてプリントアウトしておいて貰おう。そう考えつつ、彼は自分のご主人の元へと帰って行った。

い。
今の所学院は平和そのモノ。この先どうなるかは、まだわからない。

「フェンの知らない外伝1」(後書き)

ワーニング、これが作者の限界です。外伝の続編を書くかは不明。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8676m/>

妄想戦記外伝

2010年10月9日22時06分発行